

はじめに

1 刊行にあたって

植松 明石

鹿児島県の奄美大島を、勤務校（跡見学園女子大学）の民俗学・文化人類学ゼミ学生に実施するフィールドワークの地に初めて選んだのは、一九七七（昭和五二）年の夏でした。

学生たち（学生一三名、教員二名）は、当時としては珍しい現地（名瀬）集合のため、遙か南の島を目指して列車、飛行機などのうち、様々の方法を用いて名瀬に集合し、第一回の調査地鹿児島県大島郡住用村川内（現・奄美市住用町川内）に向かったのです。

学生たちは、それまで奄美大島についてほとんど知識がなく、この日までにその地理的、歴史的、文化的背景について学び、各自の調査研究テーマに関して準備をおこなってきたとはいえ、遠い初めての島を実感し、その美しい山や海をバスの窓から眺めながら、その緊張と不安はどのようなものだったかと思われまます。

一時間余りで宿泊を許して下さった生活館に入り、早速用意して下さった昼食をとり、ふたたびバスに乗って山を越えて役場に行き、挨拶し、様々の資料を見せていただき、筆写させていただいたりした一日でした。炊事やお風呂はシマの人々が引き受けてくださいました。

夜はまた、各自の調査方法についての教員の指導があり、このように、緊張した第一日目が過ぎていきました。こうして始まった一〇日間、昼も夜もシマの方々が辛抱強くご教示くださったのは並大抵なことではなかったと思われまます。

学生たちは、この調査で喜びも苦しみも経験したと言っています。喜びとは、遠い奄美文化の一端にふれたこと、何よりもシマの方々と深く親しいつながりをもったこと、そして苦しみとは調査指導のきびしさということでありました。

このような喜びと苦しみのフィールドワークは一九八五（昭和六〇）年まで九年間続き、その報告書『民俗文化』（巻末参照）を毎年刊行することができました。

それから更に歳月が流れ、卒業してからも学生たちは、度々シマを訪れ、それぞれにフィールドワークを続けてきました。シマの状況は様々に変化しましたが、シマの人々とのつながりも、奄美文化に対する認識もさらに深まり、新しい多くの方々と親しい関係を積み重ねることになったのです。

こうしたシマの人々に対するなつかしい想い、感謝の心が、新旧の写真を改めて眺めているうちに湧きあがり、本書の刊行を考えることになりました。こうして三五年前のフィールドワークに関することのみでなく、それ以後の新たな三〇年余の展開にもふれることになったのです。

この素晴らしい出会いに対する私たちの喜びの気持ちを、ぜひ多くの方々と共有したいと願っております。

二〇一五年四月一日

2 刊行にいたる経緯

浅野 博美・川北千香子
末岡三穂子・福岡 直子

本書は、跡見学園女子大学文学部文化学科で、かつて民俗学の教鞭をとっていた植松明石先生の発案によって刊行が計画されました。

先生は、大学を定年退職後、卒業生を中心とした研究会を主宰し、一九九九（平成一一）年、自宅に民俗文化研究所を開設しました。卒業生はそれぞれ仕事や家庭をもち、研究から遠ざかっておりましたが、先生の「研究は一生継続するもの」という姿勢に共感し励まされ、学生時代に奄美でフィールドワークを経験した人を中心に参加するようになりました。初めは、共通テーマ「食文化」を設定して発表を行ったり、海外生活の体験に基づくレポートをするなど、奄美にこだわることなく、各自の問題意識で研究を続けていました。

数年後、大学で保管していた一九七七（昭和五二）年から一九八五（昭和六〇）年の奄美の調査資料や写真が、民俗文化研究所へと移管されました。これらは、九年间、一一集落で学生が聞き取りをした資料、撮影写真の数々で、今となっては得ることのできない貴重な資料です。この九年間に渡る学生の調査成果は、跡見学園女子大学民俗文化研究会により『民俗文化』第二号～一〇号（一九七八～一九八六年）として発行され、すでに調査地や関係機関に贈呈されています。

しかし、それから三〇年以上が経過し、この膨大かつ貴重な資料等をそのまま眠らせておくのはあまりにも勿体ない、それを積極的に活かしたいと考え、私たち四名が中心となって、奄美でのフィールドワークを再開することにいたしました。

大学の調査の折にお世話になった奄美の方々とは、最初の訪問以降、それぞれに年賀状や近況報告などを交わすお付き合い合

はじめに

1 刊行にあたって 5

2 刊行にいたる経緯 7

例言 18

序章 「奄美」とは 19

第一節 歴史的・地理的概観 20

奄美歴史年表 23

奄美群島概況 24

第二節 調査実習の場としての奄美 25

第Ⅰ章 はじめての奄美 27

第一節 未知の世界 28

1 いざ奄美へ 28

2 調査地の日常 30

3 調査を終えて——データの共有 33

第二節 訪ねた集落 37

1 集落別人口変化 37

2 住用村川内——山懐に抱かれて 40

3 住用村見里——山に囲まれた内海 42

4 瀬戸内町請阿室——さらに離島の集落 44

5 宇検村芦検——傾斜の急な土地に穏やかな海 46

6	笠利町用——潮の干満を身近に	48
7	笠利町宇宿・城間・万屋——東海岸に沿う集落	50
8	龍郷町中勝——山の中の桃源郷	52
9	瀬戸内町諸鈍——峠からの絶景	54
10	龍郷町嘉渡——ハイビスカスと機之音	56
	【寄稿】民俗文化研究調査会との出逢いから	58
	第三節 集落滞在記	60
1	住用村川内の滞在日記——またたくまの一〇日間	60
	【寸劇】ヘンダームエラビヨット	64
2	宇検村芦検の滞在日記——出会いと別れ	66
	【インタビュー】都会から来た大学生	70
3	八月踊り唄をコーラスで	72
4	瀬戸内町諸鈍の滞在日記——調査しました。食べました	74
5	名残惜しい別れ——長期滞在を終えて	77

第Ⅱ章 人とくらし 79

第一節 働く 80

1	共同で米づくり	80
	【寄稿】奄美の農業——さとうきびを例にして	83
2	奄美の漁業——待網漁を例にして	85
3	畜産業	88
4	稼ぎは機織り	90
5	集落の店	94
6	テルで運搬	98
7	飼育する動物——ブタとヤギ	100

「らゐ」目次

「奄美群島◇島々の位置と特色」	…… 36
「稲作と儀礼」	…… 82
「奄美」とは？	…… 97

	8	自給自足	102
		【寄稿】請阿室集落の産業	104
		【インタビュー】区長の仕事	106
		第二節 着る・食べる・住む	108
	1	女の手仕事—ウンジョウウギン	108
	2	女の手仕事—キュビ	110
	3	残されたノロの神衣	112
	4	もてなし料理のサンゴン	114
	5	日常の食事	118
	6	さまざまな年中行事食	121
	7	水とのくらし	124
	8	風呂	127
	9	屋敷と入口	129
	10	家の間取りと大工さん	132
	11	ハブとハブ除け棒	134
	12	ハブ捕り	136
	13	高倉—豊かさの象徴	138
		第三節 つきあい	142
	1	子どもの誕生	142
	2	名前と社会	146
	3	七歳の祝い	148
	4	集落の土俵	150
	5	共同作業	152
	6	冠婚葬祭と助けあい	154
	7	親族の名称	157

		「こらひ」目次
		「川のめぐみ—カニとエビ」……………120
		「私的奄美の七不思議」……………135
		「奄美の東西南北」……………141
		「奄美市の誕生」……………145

第四節 楽しむ

158

1 八六歳おばあさんトリオのわらべ唄 158

2 子どもの遊び 161

3 八月踊り 163

4 十五夜の余興——住用村川内を例として 168

5 豊年祭 170

【伝承】ケンムンとガアルの話 174

6 ふなこぎ競争——ハマオレの行事として 176

7 伝説の舞台——トンバラ岩 178

8 なぐさめは豎琴 180

9 道具は石だけ「ウデマクラ」 182

10 奄美の楽器 184

11 シマジマの芸能 186

第五節 祈る・守る 189

1 さまざまなカミ 189

2 位牌祭祀 192

3 募参り 195

4 奄美大島におけるキリスト教——嘉渡を中心に 197

5 サシガミ 199

【伝承】ケンムンの話——笠利町用を例として 202

6 七夕は盆のはじまり 204

7 魔除けの石——瀬戸内町諸鈍を例として 208

第三章 歳月の贈りもの 211

第一節 変わる奄美 212

「コラム」目次	
「歌声に導かれて」……………	167
「奄美のお葬式」……………	194
「シマウタは島を越えて」……………	210

1	整備される集落	212
2	奄美大島はトンネルの島	216
3	集落をさがして	219
4	景観と海岸の変化	222
5	離島のくらし	225
6	シマの集会施設	227
7	墓の景観	230
【インタビュ】変わりゆくシマ―龍郷町中勝		
234		
第二節 変わらない奄美		
236		
1	奄美での博物館実習―大切な宝物	236
2	民家に泊まって	240
3	歓迎は横断幕で	242
4	集落に家を借りて	244
5	上がり相撲	246
6	思いがけない再会	249
第IV章 歳月をこえて		
251		
第一節 今に伝えて		
252		
1	諸鈍シバヤ	252
2	シマから発信	256
女性のパワーで農産物をPR 「サン奄美」		
256		
緋寒桜でシマおこし―川内		
258		
積極的なシマの人々―請阿室		
260		
3	琉球の島々の中の奄美―稲作、粟作などの播種儀礼から	262
4	かなえられた「十五夜」	264

「ラム」目次	
「厨子壺」	232
「きれいにしてあげたから 天国にあげなさい」	233
「ソテツと遊ぶ」	239
「奄美大島の日本復帰運動」	263
「女子の髪型」	296

5	種下ろし行事	266
	【寄稿】集落便りを都会に発信	268
6	シマの人との交流	270
	残された手紙と日記	270
	コミュニケーションの基礎を学んだ実地調査	271
	第二節 明日に向けて	272
1	シマごとの年中行事	272
	表1・住用村川内／表2・住用村見里／表3・瀬戸内町請阿室／	
	表4・宇検村芦検／表5・笠利町用／表6・笠利町宇宿・城間・万屋／	
	表7・龍郷町中勝／表8・瀬戸内町諸鈍／表9・龍郷町嘉渡	
2	多様なシマのなりわい	292
3	絆はシマウタ	297
4	生まれたシマ	299
5	シマの個性が光る八月踊り	303
6	世界の中の奄美——一重一瓶というもちよりの宴	307
	おわりに シマの方々に感謝をこめて	309
	調査と編集でご協力をいただいた方々	311
	【本書執筆者】	312
	【奄美での調査】	313
	【参照資料】	
	『民俗文化』第一号～一〇号	314
	『民俗文化研究』創刊号～一〇号	317
	参考文献	319

索引

331

編集後記

323

第一節 未知の世界

1 いざ奄美へ

それまで「奄美」とは無縁だった。奄美は、九州よりはるか南の亜熱帯気候の地であり、台風の通り道として天気予報で報じられる場所という程度でしか知らなかった。私は、漠然と野外調査というものにあこがれ、一九七七（昭和五二）年、大学三年生のとき、それができる必修科目の「演習Ⅰ（文化人類学調査実習）」を履修した。最初、指導教員から、野外調査を大島で行うと聞いた。しかし、授業の途中まで、その大島は東京都の伊豆七島の大島と思って聞いていたほどのんきで無知だった。

毎回の講義は興味深く、面白そうなことができそうだと思った。教科書は、先生自筆のペーパーだった。そして、先行研究書として

読むことを薦められた書籍は、まず、『屋久島民俗誌』（宮本常一著・一九七四年・未來社）だった。続いて、『沖繩の民族学的研究―民俗社会と世界像―』（日本民族学会編・一九七三年・財団法人日本民族学振興会）と『奄美文化誌―南島の歴史と民俗―』（長澤和俊編・一九七四年・西日本新聞社）があげられた。沖繩の郷土月刊誌『青い海』（青い海出版社）のバックナンバーにも目をとおすようにといわれ、神田神保町の地方出版書の専門店に行ったものだった。前者三冊の書籍は、今までまったく読んだことのない性質のもので、歴史・地理・旅行記とも違っていった。写真の掲載が少なかつたこともあり、たとえば、祭礼を紹介する記述は想像が難しかった。また、掲載論文は難解で、調査地特有の言葉と学問上の専門用語の理解は、広辞苑をひいてもわかるものではなかった。

授業を重ねたある日、指導教員から「本に書かれてある内容を現地に行つて確認してみると、それが違っているのではないかと思うことがある。また、新しい発見もあるはずだ」と言われた。さらに、「この学問に現地調査は必要なことで、それなくして発言することはできない」というようなことも言われた。学問とはその

ようなものなのかと聞き入ったことが、つい先日のように思える。しかし、そのようなことよりも、見知らぬ遠隔地の奄美に行つてフールド・ワークができる、ということが嬉しくてたまらなかつた。

私は、大学の授業の一環として一九七七年の最初に奄美に行つたゼミ員一三名の一人だが、履修の資格とか条件のようなものはなかつたと記憶する。しかし、後年、当時の参加者に聞くところによれば、翌年の一九七八年の二回目の奄美調査者には、次の三点が参加条件になつたようである。

まず、どこでも寝ることができることで、これは、寝る場所が公民館の板の間の上であるからであつた。そのため、シーツを袋状に縫いつけた簡易寝袋を自製し、また、ビーチマットも用意した。さらに、名瀬市内の商店で寝蓐^{ねこざ}を購入した者もいたそうである。準備がよかつたのか順応性があつたのか、板敷きのために眠れなかつた者はいなかつたという。

次の条件は、集落のお宅に訪問して出されたものは残さず食べることだつた。これは、その方の好意を受け止めるとともに、その土地の食べ物に親しみ、知ることにつながるようになるからだつた。しかし、調査を終えてみれば、これに関する心配もまったく無用で、食べられないというより食べ過ぎによる体重の増加がそれを証明していた。

最後の条件は、虫を怖がらないということだつた。公民館にクーラー等の設備がないため、窓扉は常に開けていた。夜、蛍光灯に多くの虫が集まつてくる。最初こそ騒ぎ、ミーティングにも支障があつたが、蛾が落ちてきても平気で触れるようになってい

たようである。ただ、これらの条件は日常生活に関するもので、学習欲とか研究心は二の次だつたのだろうか。

さて、奄美へ行くための準備は諸々あつた。まず、当然のこととして奄美の事前学習であり、その一部は先述したとおりである。次に、遠隔地までの旅費と滞在費の捻出である。そのためにアルバイトをした。お世話になる集落内での滞在は、専ら調査地の人たちの好意にすがる。そこで、事前に、現地で不足している学童が読む本を贈ることと決め、大学のすべての教職員・学生に協力してもらつたためのチラシの作成をし、船便で送るために本の梱包もした。

ところで、私たちの奄美行きの目的は、奄美の文化を理解することである。ゼミでは、最初に奄美の概要が講義され、その後は、各自が関心を寄せるテーマの個別指導になつた。民俗学（指導教員は植松明石）と文化人類学（指導教員は渡邊欣雄）の両ゼミ員が一緒に同じ場所で調査するということから、授業も合同のことが多かつた。

ここで、各自のテーマを記しておく。

一九七七（昭和五二）年、鹿児島県大島郡住用村川内の成果である報告書（『民俗文化』第二号・一九七八年・跡見学園女子大学民俗文化研究調査会）の目次からあげると、次のようになる。

- ① 労力交換の契機としての労働慣行
- ② 家族と親族
- ③ 婚姻形態
- ④ 産育習俗

⑤葬制

⑥生業暦と農耕儀礼

⑦年中行事

⑧三セツの儀礼

⑨食生活と共同飲食

⑩住生活と方位

⑪世界観

⑫八月踊

では、このようなテーマについて、調査地に行つてどのような尋ねたら、満足が得られることを聞き出せるか、事前に書き出してみよう指導があつた。これを質問項目と称し、聞きたい内容は当人によるが、一〇〇、二〇〇、三〇〇くらいは書いただろうか。たとえば、⑦年中行事を知りたいとした場合、例にして示すと次のような質問項目が考えられる。

- (1)正月を迎えるために、暮にはどのような準備をしますか。(2)それは、女の人がしますか、男の人ですか。子どもがしますか。おとなでしょうか。(3)門松はたてますか。(4)餅つきはしますか。(5)正月の料理にブタは欠かせないものということですが、家で飼育しているのですか。ブタをしめると聞きましたが、どこでしますか。浜ですか、庭ですか。家によって決まっていますか。(6)ブタを使った一年分の保存食とはどのようなものですか。(7)正月は、新暦でしますか。それとも旧暦でしますか。(8)いつ頃から新暦になりましたか。戦前ですか、戦後ですか。それとももつと前ですか。(9)新暦の正月をオランダ正月と呼んでいるところが

あるようですが、この集落でもそのようにいいですか。(10)暮れには墓参りをしますか。」

といった具合にノートに書き出せるだけ書いておき、調査地で尋ねるのである。質問項目をいくつ書いておいても、その行事はしない、聞いたこともない、と言われてしまえばそれまでであるから、全国各地の民俗報告書を読みテーマに沿つた質問項目をひねり出した。しかし、質問項目とはこのようなものというテキストがあるわけでなく、日本本土はもちろん、沖縄とも異なる歴史的・文化的背景がある奄美を理解するための質問項目の作成には四苦八苦した。そして、準備不足を反省し、大方の者が現地での滞在時間の不足をなげくことになるのだった。

現地では、大部分の時間を話を聞くことに費やす。したがって、集落の方にはその間は仕事の手を休めていただく。つまり、大事な時間を私たちの研究のためにいただくのである。指導教員からは「あなたたちは、調査をするのではなく、調査をさせていただくのです」という注意の話があつたことは、今でもときおり思い出す。

2 調査地の日常

調査した奄美の集落の概況、および個々の事象は次節以降で紹介するが、ここでは、筆者が初めて奄美調査を経験した一九七七(昭和五二)年の住用村川内に滞在した折の一端を紹介し、当時の野

外調査の様子を記しておくこととした。

一三名の学生が、関東から、夜行寝台列車、船、飛行機等それぞれの交通手段で名瀬市のバスターミナルに集合し、調査地の役場へ向かう。指導教員と調査者全員で挨拶し、調査のために有益な資料の収集をする。役場の複写機を利用していただいたが、大部分は鉛筆で転記した。資料とは、たとえば、行政要覧・地図・農業や漁業関係の統計資料である。また、郵便局に出向き、各家を訪ねるために必要な地図を写させてもらい、その後、持参した黒色のカーボン用紙で調査者分を複写した。見知らぬ土地の家を訪問するにはこれが頼りである。このようなことができたのは、すべて、御地の方の格別な配慮からであった。

その作業後、一日間の滞在期間に寝食をする集落内の公的施設（生活館・公民館等）で集落代表の方と会い挨拶をする。第二節「訪ねた集落」で紹介するほどの集落も、調査は八月一日前後から始まり、滞在期間中の日々の記録は記録係が書き残した。その記録については、第三節をご覧ください。

ではここで、一日のスケジュールを簡単に記しておこう。起床は午前六時。朝食をとる。食事のまかないは、調査地の女性二人の方をお願いした。三食を自分たちでつくることは、調理に慣れぬ当時の私たちには容易なことではない。また、なるべく地元の食事をいただきたいという意味もあつたからである。生活館に設置された台所で調理していただいた。

朝食後、ミーティングがあり、終わると集落内の家々をひとりずつ訪問する。公民館に戻り昼食をとる。ミーティングをし、指導教員

から個別指導、休息、また集落内の家へ向かう。夕食に戻る。その後、決められた家にお風呂をもらいに行く。夕方からの行動に懐中電灯は必携である。必ず、「ハブに気をつけなさい」といわれる。仕事から帰ってきたばかりの方から話を聞いて帰ることもあった。聞いたことを忘れないうちに、その日にノートにまとめる。一〇時が消灯という規則はあった。しかし、日がたつにしたがい、三度の食事以外の時間は乱れてくる。

調査内容がまとまらないあせりで、時間かまわず先生に尋ねた。就寝が一二時を過ぎることもあった。暑い日の公民館の中は三五度に達することもあり、寝苦しい翌朝のミーティングは眠かった。しかし、元気でよく食べた。そして、私たちは、まだ、指導教員の骨身を惜しまない二四時間労働を、なんとも思わない年齢だった。すでに、私たちの訪問は人々に知らされてはいたが、「こんにちは」「ごめん下さい」と声をかけても家から人が出てこないことがあった。勧誘の人間と間違われたこともあった。嫌われたかと思つた。

次第に、「キャオロウ（ごめんくださいの意）」と大声で言うことと返事がくることがわかった。挨拶状（資料1：次頁参照）を渡し、恥ずかしいような自信のないような声で訪問した意図を伝えると、笑顔で家の中へ迎え入れてくれた。門に表札が出ている家ばかりではなかった。また、生垣がめぐらされ、どの家の屋根も黒く、同じように見えた。藪があると、ハブが出るのではないかと遠回りもした。一〇〇軒にも満たない戸数なのに、目的の一軒が探せなかったこともあった。留守なのに玄関の扉を開けたままで鍵をかけない家

資料 1：各戸に渡した挨拶状

ご あ い さ つ （調査の御依頼）

わたくしたちは、新見学園女子大学文学部文化学科の学生であります。

このたび この地方の わかしから今にいたる風俗・習慣につきまして、実際に皆様からお話をうかがい、日本人のさまざまな生活のありかたについて学ぼうと思っております。つきましては おいそかしいところを まことに恐縮でございますが、下記期間中わたくしが訪問いたしました折には 当地方に伝えられるさまざまなお話や、現在の生活のありさまにつきまして 是非お教え下さいませよう 切にお願い申し上げます。

なお、この訪問につきまして 御質問がございましたら、どうぞ郵送度なく引率者におたづね下さいませよう おねがい申し上げます。

記

訪問期間： 昭和52年8月1日 ~ 8月10日

引率者： { 榎 松 明 石（新見学園女子大学助教授）
渡 辺 欣 雄（新見学園女子大学講師）

学 生 13名

宿 舎： 川内生活館

新見学園女子大学文学部文化学科
〒352 埼玉県新原市中野1-9-6
TEL. 0484 (78) 3333 (代)

もあつた。

一日に、学生ひとりごとが五〜七軒の家をまわり、留守宅以外は全戸をお訪ねした。集落の誰からも、物知りといわれている人だけに聞くのではなく、また、集落の役職についている人だけに聞くのではなく、全戸から聞きとるということに興味をもたせた調査であった。

どの家についても共通に、集落内での組や班の所属、家族構成、生業・仏壇や神棚の所在・どのようなときに誰と共同で農作業をするかといったことを聞いた。公民館に帰って整理してみると、聞き損じがあるからまたその家に出かける。それを繰り返し返す。この戸別調査が終了したことは、指導教員二名の、「OK」サインを

もらうことであり、これがないと次のステップへいけない。そうしないと、自分自身のテーマに沿った調査にとりかかれないのである。

さて、調査も半ばになると、暑さや集落の言葉にも慣れてくる。公民館には、積極的に話をしにきてくれる方も出てきた。差し入れにトマトやスイカ、自家製のアクマキ（二二頁）をもつてきてくれる方もいた。子どもたちが生活館の窓から室内をのぞき、わたくしたちと目をあわすと、恥ずかしそうにして逃げていった。

朝のミーティングでは、調査の進み具合を発表した。また、集落で、話し好きな人はだれさんとか、あの人はこの話にとっても詳しいといった情報を交換した。何でもよく知っている人のところには、どうしても調査者が集中してしまう傾向になるので、なるべくそのようなことがないようにとか、いただきものをした人の家に次の人が行ったらお礼をいうように、ということも伝えあつた。

調査の中日には、懇親会を開いた。その日は、調査の約束をした人を除き調査はしない。生活館内の椅子や飲食の準備、私たちの余興の練習があつた。懇親会は集落の方たちとの交流の場だが、集落に伝わる芸能を披露していただける機会でもあり、うかれてばかりはいられなかった。調査の絶好な機会でもあつた。懇親会には集落の常会より多くの人が集まったのではないかもいわれた。集落の人たちの豊かな遊び心とのどに比べ、私たちの持ち駒はさびしい。しかし、ヒットはあつた。それは、指導教員脚本によるシマ言葉の寸劇である。多くの人を笑わせ、川内では今でも語り草になっているという。ぜひ、六四頁を参照していただきたい。

懇親会以後はより親しみがわき、道で会って立ち話をするようにもなった。その集落にとつて日常的なことも、私たちにとつては新鮮なことであった。川内以外の集落においてもさまざまな交わりがあり、遠方に海水浴に出かけたり、板付け船に乗ったり、薪で沸かしてくれた五右衛門風呂に入ったたり、古くからの慣習の洗骨に立ち会つたり、サンゴン料理の手伝いをしたり（二一六頁参照）、ノロの衣装や一族の系図を拜見したり、夜の一二時を過ぎても八月踊りをしたり、家の間取りを書いたり、青年団と交流をもつたり、集落の方がおやつをつくつてもつてきてくれたりと、あげればきりが無い。

しかし、私は、シマの言葉は挨拶程度しか覚えることができなかつた。明治三〇年代生まれの方からの聞き取りは、どうしても言葉が通じず、また、先方も標準語では話しにくい様子だった。川内では、それを察した隣家の人がわざわざ出てきて通訳をしてくださつた。

また、昼食の時間だから生活館で用意していただいた食事があるからといっても、家をつくつたから食べていつて欲しいといわれた。一日に二回の昼食を食べたのは、決して私だけではない。

調査地での人々との別れはとてさびしく、にぎやかだった学生が急に無口になり、集落の人と手をとりあい、涙をぬぐつた。そして、バスの窓から、集落が見えなくなるまで、いつまでも手を振り続けた。

そのような気持ちにさせた二〇日間の集落の方とのつながりは、懐かしさをともにし、今日に続いている。

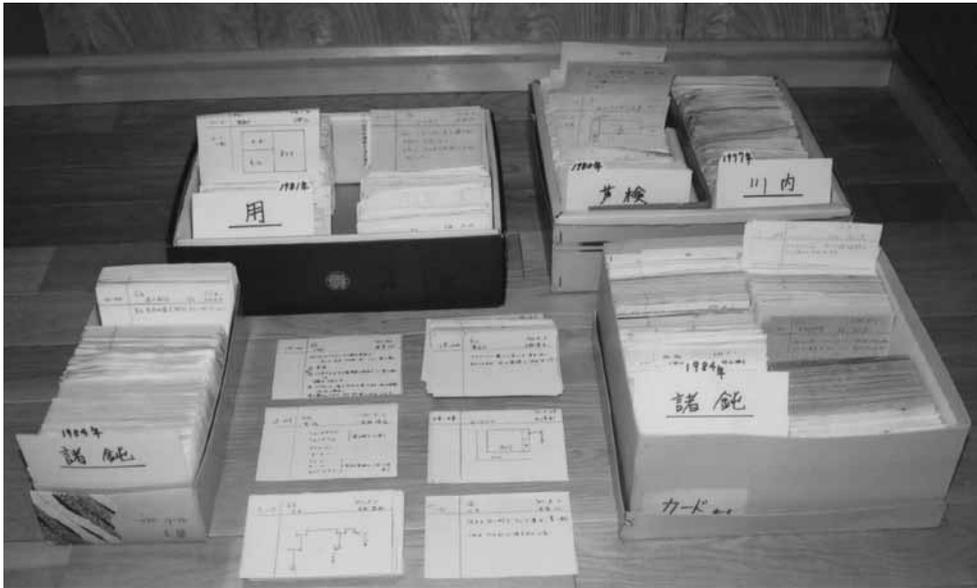
3 調査を終えて——データの共有

奄美調査を終え、まだ夏休みが終わらないうちに指導教員から手紙が届き、同封されていたものが、次頁の資料2である。調査終了後の作業手順が期限厳守で書かれてあり、細部に至る注意事項と調査地への礼状を忘れないようにということが書かれてある。

さつそく、聞き取りしたノートを整理したが、なんで一〇日間しか滞在しなかつたのか悔やまれることしきりで、あれも聞いてない、これも聞いてなかつたと思うことが多く、レポートが書けなかつたと思つた。

各自が、B4判の大きさのコピー用箋をB7判に八分割し、統一した「調査資料カード」を規則にしたがって作成し、調査参加者がこれらのデータを共有する作業をした。資料3が指導教員から示された書き方であり、資料4は、八分割前のカードである。カード枚数は、一人が二五〇枚とすれば、一三人分で三二五〇枚となる。ひとりの調査者がひとつの事柄について、集落の複数の人に尋ねる。一〇人の人に尋ねれば、一〇枚のカードがつけられる。その内容が同じこともあれば、多少異なることもあつた。知りたいことが必ずしも得られるわけでもなかつた。しかし、このようにして、たくさんの方が集積されたことは共同調査として意味深いことだった。

写真 1 : 各調査地で得られた大切なデータ (奄美再調査を奮起させたもの。福岡所有)



資料 4 : データのとり方

11-37	Fc	1922.8.3
		23夜の旅おがみ 林ヨウ
		別名 旅まち ヒウ
11-38	Fc	1922.8.3
		23夜の旅おがみ 林ヨウ
続		月が出ると始める。
11-37		手をあわせて出かせで、内地にいる人も祈る。
	Fc	1922.8.3

「11-37」は「調査者番号とカード番号」である。「Fc」は、大項目 (F) と中項目 (c) であり、この場合は F は信仰、c は民間信仰を示す。小項目は「23夜の旅おがみ」である。調査年月日と話者を右に記し、小項目の内容は下の欄に記す。資料 2, 3 は指導教員から渡されたもので、資料 4 は福岡が書いたものである。

資料 3 : 調査項目の目安 (B4判 15 枚に手書き)

調査項目の目安 1

この資料は、調査資料カードを作成するときの各項目のランクと分類とを示したものである。資料を分類するときには、この諸項目を目安として分類する。

大項目・中項目・小項目は項目で分類し、大・中項目は記号を、小項目は項目名を調査資料カードに記載する。

例:

	Ba	B = 大項目, a = 中項目, 仕事者
	仕事者	= 小項目

なお、小項目は、類別を以下に列記するが、小項目は土地ごとの資料によって異なることが多いので、類別に従う必要はない。

例: 類別にはない小項目の例 → オナリガミ・モイドン・イコトヒ...

この目安は、暫定的なもので、提案があれば、より良いものに修正してゆくつもりである。

A 概要

a 自然環境

- 大項目
 - 小項目
 - 位置 (経緯・面積・海拔など)
 - 地形 (地勢・河川・湖沼・潟干など)
 - 土壌 (地質・土質名・分布・肥力度など)
 - 畜産 (飲牧資源・河川・湖沼などの性質など)
 - 気候 (気温・湿度・雨量・風向・風力・晴雨率など)
 - 動植物 (付近に棲息している動植物の種類・名前など)
 - 人体形質 (人々の自然人類学的特徴)

b 人文環境

- 村落 (区・大字小字境・郷境・町境など)
- 交通路 (線路・道路・駅・停留所・渡場・橋など)
- 土地利用 (田・畑・森林・茶園・宅地・森林・用排水路など)
- 公共施設 (夜校・学校・郵便局・集会所・病院・集会所など)
- 祭事地 (神社・祠・堂・寺・宮・墓地・聖地・霊山など)
- 作業場 (精米場・水車・工場・倉庫など)
- 所有地 (国有地・村有地・部落有地・社有地・私有地など)
- 集落形態 (民家の分布など)

前頁の写真1は、すでに三〇年を経た、通称青焼きコピー（ジア
ゾ式複写機で複写）だが、保存状態がよかったのかあまり勉強しな
かったのか、今でも書かれた文字は鮮明に残り、見るたびに苦い
経験が思い出される。教員に提出したレポートは何度も書き直し
をした。「もう一度奄美へ行って聞いてこなければならぬけれど遠
い」と悩んだ。返信用の手紙と切手を同封した手紙を調査地の方
に送って教えていただいた者もいた。

一九七七（昭和五二年）以後、大学では民俗学と文化人類学の両
ゼミ合同の奄美調査が一九八五（昭和六〇）年まで継続され、その
成果は、『民俗文化』第二号から一〇号として刊行し、毎年、お世話
になった集落、役場へ送らせていただいた。

調査当時は、明治生まれの方から話を伺ったが、その多くの方
たちは逝去され、現在、わたくしたちは、同世代の方たちとの交流に
なっている。そこで思い立ったことは、奄美の再調査だった（拙稿
「旅の責任」―奄美再調査へ始動―『まほら』三三二号・二〇〇二年・旅の
文化研究所）。そして、かつて奄美調査をした仲間とともに、再訪を、
楽しみながら開始したのである。

久しぶりの奄美は変わっていた。それは、かつて無意識に撮影
した景観写真と見比べても明らかだ。しかし、変わらない奄美も
あり、また、新しい奄美もあるだろう。奄美との出会いから歳月を
経た今だからこそ、書ける何かがあるかもしれないと感じた。そ
して、その完成は、奄美へ引率してくださった指導教員へのレポー
トの再提出であり、何よりも、お世話になった調査地の方々への感
謝の集大成となれば嬉しいと思っている。

（福岡 直子）

奄美群島◇島々の位置と特色（24頁地図参照）

島の位置・面積・人口――

鹿児島県と沖縄県の間、九州の南方洋上、北方は北緯28度32分44秒、南方は北緯27度01分07秒、東方は東経130度02分07秒、西方は東経128度23分43秒の間に連なる島々である。

奄美大島（面積：712.48km²、人口：63138人）、加計呂麻島（77.39km²、1379人）、請島（13.34km²、131人）、与路島（9.35km²、93人）、喜界島（56.93km²、7802人）、徳之島（247.77km²、25292人）、沖永良部島（93.67km²、13637人）、与論島（20.47km²、5436人）の有人8島と多くの無人島より形成される。

群島の総面積は1231.40km²、総人口は118,773人（平成22年国調）である。市町村数は合併などを経て、現在は1市9町2村となっている。

各島の特色――（奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島については97頁を参照）

喜界島（喜界町）：奄美大島東側に位置し、名瀬港から同島湾港までの航路距離69km。比較的平坦で、耕地面積が島の40%を占める。耕地に恵まれ農業が盛んで、サトウキビ栽培、花卉や野菜の生産、畜産（肉用牛）が営まれ、クルマエビ養殖も行われている。

徳之島（徳之島町、天城町、伊仙町）：奄美大島の南西に位置し、名瀬港から同島亀徳港まで航路距離109km。群島内、奄美大島に次ぐ面積であるが耕地面積は群島一。サトウキビを主体に、野菜、畜産（肉用牛）の複合経営の農業が行われている。漁業はマグロ漁、瀬物一本釣り漁業が営まれている。

沖永良部島（和泊町、知名町）：徳之島の南西に位置し、名瀬港から同島和泊港まで、航路距離163km。隆起珊瑚礁からなり、平坦地が多く耕地に恵まれている。ゆり、きくなどの花卉栽培が盛んで、ばれいしょ、里芋などの野菜、サトウキビが栽培されている。

与論島（与論町）：沖永良部島の南西に位置し、名瀬港から同島茶花港まで航路距離209km。群島最南端の島。沖縄本島が眺望できる。山岳、河川がほとんどない。農業は、サトウキビと肉用牛、野菜、花卉類の複合経営。マンゴーの果樹栽培も増えつつある。

（末岡三穂子。参考資料『平成25年度奄美群島の概況』鹿児島県大島支庁、2014年）

第二節 訪ねた集落

1 集落別人口変化

群島の概況

『奄美群島の概況』（平成二二年度版）による奄美大島全体の人口変化は、

一九五五年（昭和三〇年）	一〇三、九〇七人
一九八〇年（昭和五五年）	八五、六〇〇人
二〇〇五年（平成一七年）	七〇、四六二人

であり、「特に十五歳から六四歳の人口は昭和六〇年を境に減少し」「男女比は女性一〇〇に対して男性八九で、これは仕事などが理由で男性の島外流出が女性より多いことにも一因がある」とな

っている。

また約三〇年前のゼミ調査として奄美を訪れたときと二〇一四年時点での人口を集落ごとに示したものが次頁の集落別人口変化表である。ここでも人口は減少方向にあることが見て取れる。

集落の中でも、とくに人口・世帯ともに減少しているのが瀬戸内町請阿室であるが、請阿室は奄美本島から一日一往復の船で約五〇分の請阿室にある。このように交通が不便なことに加え、請阿室には医療施設が整っておらず、高齢者は病気になる通院ができなくなり、請阿室から出て行くことになる。また請阿室には自宅から通える範囲に高校がなく（奄美大島の高校は本島に四校ある）、子どもも中学を卒業すると請阿室を出て行くことになる。

高校卒業後の進学は、奄美大島からも出ることになり、大きな産業もないため就職時も集落に戻らないことが多く、請阿室の人口は減少していく。これは奄美全体にもいえる人口減少の原因であり、請阿室はそれが顕著に出ている集落といえる。

しかし集落別人口変化を個別にみると、各集落とも人口の減少ほど世帯数は減っておらず、住用村見里のように人口は減少して

集落別人口変化

調査地点	調査地 / 調査年	人口 *	2014年人口 **	
①	住用村 川内 1977年	世帯数	67	75
		人口	185	151
		男	90	74
		女	95	77
②	住用村 見里 1978年	世帯数	72	108
		人口	223	190
		男	110	87
		女	113	103
③	瀬戸内町 請阿室 1979年	世帯数	74	37
		人口	202	59
		男	--	32
		女	--	27
④	宇検村 芦検 1980年	世帯数	127	137
		人口	323	276
		男	--	125
		女	--	151
⑤	笠利町 用 1981年	世帯数	94	77
		人口	304	136
		男	--	64
		女	--	72
⑥-1	笠利町 宇宿 1982年	世帯数	107	124
		人口	296	262
		男	--	123
		女	--	139
⑥-2	城間 1982年	世帯数	31	31
		人口	90	57
		男	--	28
		女	--	29
⑥-3	万屋 1982年	世帯数	70	78
		人口	206	170
		男	--	77
		女	--	93
⑦	龍郷町 中勝 1983年	世帯数	85	240
		人口	249	525
		男	--	267
		女	--	258
⑧	瀬戸内町 諸鈍 1984年	世帯数	134	110
		人口	307	188
		男	141	92
		女	166	96
⑨	龍郷町 嘉渡 1985年	世帯数	115	164
		人口	294	244
		男	132	101
		女	162	143

*：『民俗文化』第二～一〇号の各調査成果より転載する。

**：奄美市役所・龍郷町役場・宇検村役場の各ホームページ掲載の2014年2月28日現在の人口で、同年3月19日の検索による。なお、2006年3月に名瀬市、住用村、笠利町が合併、奄美市となっている。また、瀬戸内町役場には、同年月日の人口を、同年3月19日に、電話で問い合わせた。(作表：浅野)

いても世帯数は増えている集落もある。これは奄美の特徴として、子どもは独立時に親の世帯を出て別居、その後親の家に戻るときでも、親夫婦と子供夫婦の同居は行われなため、親世代の一人家族が多くなっていることが理由にあげられるだろう。

そして、唯一爆発的に人口も世帯数も増えているのが龍郷町中

勝である。中勝は本茶トンネルができたことにより名瀬へも空港へも短時間で行けるようになって通勤に便利な土地となり、子どもは高校まで自宅からの通学が可能な集落になったことが人口増加につながっている(詳細は二一九頁参照)。

(浅野 博美)

調査集落



※ ①～⑨は、右表「集落別人口変化」に一致する。「平成11年度奄美群島の概況」(平成12年3月31日、鹿児島県大島支庁総務課編集発行所収「奄美群島概況図」)をもとに作成。

2 住用村川内——山懐に抱かれて

南の島へ

しなやかなネムノキの枝葉が、開けたバスの窓から入り、座った私たちの頬をなでる。亜熱帯性気候特有の植物の匂いや鳥の鳴き声で、次第に眠気が覚める。船で名瀬港に午前五時半に着き、バスターミナルから九時一〇分発のバスに乗り、目的地の川内かわちに向かう山中のことである。バスには、沿線の郵便局に運ぶ大きな布袋に入った手紙や小包が積まれていた。

くねくねとした坂道を上り続け、峠かと思ったとき、ようやく展望が開け、奄美の海が見えた。太平洋である。そして、空の青と海の青の違いを知ることができた。バスのなかには、私たちとダイバーの熱気に満ちていた。これから、国道五八号線を一気に下る。バスは海沿いの集落を通過し、東仲間ひがしなまの集落の停留所で、危うく降り損ねるところだった。

というのは、そこからさらに奥まった川内をバスは通らず、私たちがそこに行くためには、東仲間の停留所から二〇分ほど歩かなければならないからであった。



写真1：川内の集落と上川。集落は組を単位に構成され、8組で社会生活が営まれている。(1977年8月)

どこのシマからきたの？

川内の生活館では、早速、用意して下さった昼食のカレーライスをいただき、必要な筆記用具程度をもち、一一時のバスで住用村役場のある西仲間にしなまへ出向いた。八月一日から一〇日まで実施する野外調査のための各種基礎データと、各戸を訪問するために必要な地図を写させていただくためだった。

役場からの帰り道でのことである。炎天下、麦藁帽子を被った一五名ほどの一団が歩くようすが奇妙に思われたのであるうか、農作業をしていた地元の男性から声をかけられた。「どこのシマからきた？」と。私は、妙な聞き方をされる方だと思いい、おかしい返事とは思いつながら日本地図を思い浮かべ、「本州からです」と答えた。男性は怪訝な顔をしており、通じない。先生に助けを求めると、「東京からですといえばよいのです」と言われ、そのとおりに話したところわかったようので、その方は笑顔になった。

奄美の方は、自分が生まれ育った土地のことを、愛着をこめてシマという。話の内容によってシマの領域が広くも狭くもなるが、農道での会話では、東京が適当だったのだ。私の事前学習が応用できなかったのである。今でもこのときのことは笑いの種だが、こ



写真2：お茶やスイカをいただきながらノートに記す。(1977年)



写真3：生活館の懇親会で。調査の中日は集落の人との交流会。子どもたちも集まってきた。(1977年8月)

の「シマ」こそが、奄美の文化を知る上で大切なものであることがわかってきたのは、それから何年もたってからのことだった。

力水と親切をいただいて

奄美の集落といえは海に開けていると思われがちだが、川内は違っていた。集落の南には、川内川がほぼ東西にゆるやかに流れ、北には緑濃い山。その山懐に抱かれるようにして家々は集まっていた。集落内には、上川うがわと里川さとがわの二本の小河川が山から流れ出ていた。上川からの水はとくに力水ちからみずと呼ばれ、枯れたことはない。私たちは、毎晩この力水のお風呂に入れさせてもらっていた。

昼間、各家をまわって話をうかがう。年長者であればあるほどその方の言葉を理解できずに困る。すると、隣家の若い方が来て通訳してくれる。また、「みしよれ。みしよれ(召し上がらなさい。召し上がらなさい)」と、珍しくおいしいものを出してくれる。昼間勤めに出ている方とは話す時間がない。そのため夕食後、自宅にお訪ねすると、帰りは調査拠点の生活館まで送ってくれる。また、有給休暇をとり、一日中、何人もの学生につきあって話を聞かせる方もいらっしやった。

最後の日、お風呂をいただいていた四軒それぞれにお風呂代のお礼の包みをおもちしたところ、どのお宅からも、「私たちは、それをもらうためにお風呂に入れたのではない。もってきて使っていた洗面器だけ記念にもらって、ときどき思い出すからね」といわれ、人の情けも教えられた野外調査だった。

(福岡 直子)

3 住用村見里——山に囲まれた内海

内海うちうみのシマ

名瀬から繁華街を抜け二〇分程するとバスは亜熱帯の山に入る。濃い緑の草木が左右に繁り、バスは山道を登る。山の頂上、朝戸峠あさとまで来ると太平洋の鮮やかな青い海が視界に入る。バスが山を下って行くと、左手に太平洋に臨む和瀬わせの集落が見えてくる。住用村の最初の集落だ。名瀬から一時間半以上が過ぎた頃、東城とうじょうという集落のバス停で降りる。

東城集落の前には川内川かわうちが流れている。しばらく前に雨が続いていたせいかわ川は茶色い。奄美に着いてから、湿度が高いと思っていたが、住用村は川が多い地帯のせいかわ、さらにじめつとした湿度を感じる。背の低いマンングロープのある川に沿って下流に向かって五分ほど歩くと、松崎鼻まつざきはなという名の、内海に出張った標高八〇メートルの小さな山を曲がる。寝袋やゴザを背負い、まさに重装備で歩いてきたが、ようやく見里の集落が見えてきた。

一九七八（昭和五三）年八月一日、私たちは住用村見里に入った。見里は三方を標高三〇〇メートルから四八〇メートルの山に囲

まれた集落で、バス停からも一キロメートルほど離れている。内海が近くにあるため平地はいくらかあり、海に近いが山が防壁となり、よほどの台風でもなければ直接被害を受けることは少ない。水田も近くにあった。

見里の十日間

見里に着くと、政木好区長まさきよさぶら、そしてこれから一〇日間の食事を賄ってくださる久留さんひるめ、松島さんらにご挨拶。続いて今回、見里集落を紹介してくださった奄美民俗研究者でもある和瀬の小学校の本田碩孝先生ほんだひろたかにお会いする。午後は西仲間の住用村役場にバスで行き、役場の方から話を聞いた。その後、見里に戻って政木区長と見里集落に入る手前の山、松崎鼻の山を登る。



写真1：住用村見里。松崎鼻に登って見里集落を見る。（1978年8月）

松崎鼻の山の頂上には古くからのお墓が所々にあり、古いお骨を入れた甕かめが埋まっていた。この山のもち主の先祖の墓だ。見里の墓地は昔から各家が所有する土地にある。墓は集落に沿った山の側面や川沿いにもあった。松崎鼻の山道はめつた

に人が通ることはなく、雨が降った後だったのでハブが出没しそ
うだった。松崎鼻の頂上からは見里集落がよく見えた。

私たちが一〇日間宿泊する見里の生活館は、集落の北側の真ん
中の山沿いにある。商店は三軒。民家は平屋の家が多く、二階建て
の家は少ない。鉄筋三階建ての大島紬の工場はひとときわ高い。

かつて米を備蓄していた高倉も一棟残っていた。初めて見る南
国の建物だ。ただし今は物置になっている。家々の庭にはバナナ
の木が青々と生い茂り、小さな実をつけていた。ハイビスカスや
ブーゲンビリアの花は、とても色鮮やかで美しかった。

朝は見里集落の端にある南側広場の、シマの子どもたちとのラ
ジオ体操から始まる。朝食、ミーティングを終えて、各々の調査宅
へと向かうが、お茶うけにパイアの漬物や黒砂糖のほか、昼食、
夕食まで頂くことがあった。皆一〇日間で着実に体重を増してい
た。お風呂は個人のお宅に借りに行っていたが、風呂上りの歓談
も話を聞く機会だった。また、歓迎会を設けてくださり、奄美の八
月踊り、六調の節の早い踊り、ウデマクラ等を教わった。

そのときに頂いた差し入れには、スイカやお菓子の他に黒糖焼
酎やミキがあった。黒糖焼酎やミキは私たちには初めての味で、
黒糖焼酎はキレのあるすっきりとした味だった。また、ミキは甘
酒とは違う珍しい飲み物だった。お札に私たちが上演したシマこ
とばの寸劇は、あらかじめ何度もシマの言葉を教えていただいで
いたのに、本番では発音が変なのか、にわかじこみのシマクチに大
笑いをされてしまった。

生活館には、小さな子どもたちが遊びに来ていた。大人の方々

も気にかけてくださり、いつも賑やかだった。先生による私たち
の中途半端な調査内容への厳しい追及は辛かったが、私たちはケ
ンムンの話も聞くことができ、祝儀、不祝儀をもとに一族の系図も
作成させていただいた。紬を織る仕事を休めてまで話をして
くださったり、時間をさいて話につきあってくださった見里の人
たちにとっては、とんでもない一〇日間であったに違いない。

生活館では、板の間なのでなかなか寝付けなかったが、その生活
も五日を過ぎる頃から次第に慣れ、熟睡できるようになった。ゴ
キブリの大きさに驚いたり、夜道で梟が鳴いて怖かったり、就寝中
に小さな蛙が口の中に飛び込んだりと、ハブニングもあった。

最後の日、久しぶりの太陽とともにスコールに見舞われた。そ
の中を松崎鼻の角で、私たちが見えなくなるまで見里の方々が見
送ってくださった。そして私たちは涙のスコールで東城のバス停
まで歩いたのであった。

(川北千香子)



写真2(上)、写真3(下):見里の公民館にて。歓迎
会で八月踊りを指導してくださった見里の人たちと
本田先生、森山先生の飛び入り余興。(1978年8月)

奄美の人・暮らし・文化 — フィールドワークの実践と継続

2016年6月20日 初版第1刷印刷

2016年6月30日 初版第1刷発行

監修者 植松 明石

編者 民俗文化研究所 奄美班

発行者 森下 紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03(3264)5254 fax. 03(3264)5232

<http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

装幀 野村 浩

ISBN978-4-8460-1521-3 C0039 ©2016 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替え致します